新潟医療福祉大学 教職支援センター

NEWS LETTER

Niigata University of Health and Welfare
Teaching Career Support Center

No.11
2023.11

CONTENTS

1. 巻頭言：
「子どもにとっての“よい授業”って、なんだろう？」
2. 卒業生の活躍
3. 2023年実施 教員採用試験結果／
合格者スペシャルインタビュー
4. あとがき

子どもにとっての“よい授業”って、なんだろう？

教職支援センター運営委員　**針谷　美智子**（健康スポーツ学科）

「授業は準備が９割…。」「教材研究には時間をかけるように」とよく言われますが、皆さんは、授業を創るうえで大切なこととは何だと思いますか？

私は、**「授業には必ず子どもたちがいる」ことを考える（忘れない）（置き去りにしない）ことが大切ではないかと思っています。**どんなに綿密に計画された授業であっても、目の前にいる子どもたちの興味・関心や運動欲求に合わない授業では、つまらないと感じます。では、子どもたちに評価される“よい授業”とは、どんな授業でしょうか？ 学習時間や学習規律などの基本的な条件を中心に紹介します。

よい体育授業は「学習の勢い」があり「学習の雰囲気」がよいといわれています（高橋、2010）。「学習の勢い」とは、「授業のマネジメント」「学習の規律」といった条件が整っていて、**一授業時間中の学習量や学習密度が高い**ということです。「学習の雰囲気」とは、**子どもたちが情意的に解放されていて、仲間との肯定的な人間関係に支えられている**ということです。体育は、体育館や校庭など広い空間で身体活動を介して学ぶ科目です。こうした条件が整っていることは、教室で行われる他教科以上に学習成果に影響します。

先日、とある小学校でマット運動と縄跳びの単元を組み合わせた授業を参観しました。参観して最も驚いたことは、準備や移動の時間が極端に少なく、運動従事時間が豊富に確保されていたことです。なぜ、こんなにもスムーズに流れる授業だったのか？ その理由は、「場を広げすぎない」ということでした。マット運動で準備したものは、各グループに小さなマット１枚だけ。縄跳びは、各自が持参した縄跳びのみ。場づくりは非常にシンプルですが、同じ場を使って複数の課題に取り組めるように工夫されていたのです。子どもたちは自分に適した課題を選んで挑戦的に取り組み、仲間の活動には応援や拍手をする、まさに、学習の勢いがあり、雰囲気のよい授業であると感じました。

近年、個別最適化した学びや協働的な学びを実現するための授業研究が盛んに行われ、いくつもの場を設定したり、ICT機器を活用したりする授業が増えてきました。しかしながら、準備や片付けに時間がかかり、運動時間が十分に確保されない授業も増えてきたように感じます。紹介した授業は、よく授業研究をしている人は、昔ながらの授業だと思うかもしれません。それでも時には、子どもたちが思い切り活動し、「あー、楽しかった！」「先生、〇〇ができるようになったよ！」と笑顔あふれる、楽しい授業も必要だろうと感じています。

卒業生の活躍

現職教員として活躍している笹川先生の
一日の仕事を取材しました。
教員を目指す皆さん、是非参考にしてください。

笹川　歩希 さん
（2018年度卒業生、小学校教員養成特別プログラム１期生）所属：新潟県内小学校

■一日の流れ

7：30	欠席者確認、児童と電話連絡、授業準備等
8：05	教室へ移動　提出物の確認
8：15	朝清掃
8：15	朝の会　連絡事項の伝達、健康観察等
8：40	１限　２限
10：15	20分休み　宿題確認、児童と交流
10：35	３限　４限
12：10	給食 連絡帳確認、連絡帳に書く内容を板書
13：00	昼休み 児童と交流、委員会の打ち合わせ、面談等
13：35	５限　６限
15：15	帰りの会 今日の振り返り、明日の予定確認等
15：30	下校指導
16：00	職員終会
16：15	欠席児童への電話連絡、授業準備、 来週の予定作成、担当分掌の起案文書作成等
19：00頃	退勤

■体育授業を参観させていただきました

この日は表現運動の授業でした。導入では、体と心をほぐすために、新聞紙を使ったペア（二人組）あそびを実施していました。広げた新聞紙を二人がそれぞれで持ち、「せーの！」の声にあわせて位置交換して相手の新聞紙をキャッチをしたり、一人が投げた新聞紙をもう一人が下を潜って移動したりするようなあそびをして児童が授業に入りやすくする工夫をしていました。その後、本時の課題を確認し、授業のメインの活動に入りました。今回は「走る－止まる」という動きから児童それぞれがどんなイメージを持ち、そのイメージをどのように動きに変えていくかということを課題にしていました。笹川先生は、「走る－止まる」のイメージとして「50m走」、「忍者と泥棒」、「つり橋を渡る」、「熱い砂浜を走る」というようなイメージから具体的にどのような動きに変化させていくのかということを自ら見本をみせながら児童へ指導を行っていました。そこから児童同士が話し合いや動きを試しながらペアや個々の学びを深めていました。この活動を通して、児童が非常に楽しそうな表情を浮かべていることがとても印象的でした。笹川先生は、ダンスや表現運動が専門ではありませんが、様々な研修会や研究会等に参加しながら、いろいろな運動・スポーツ種目について学び自己研鑽を積んでいるようでした。

２０２３年実施　教員採用試験結果

現役合格者７名輩出！ 卒業生11名合格

今年度実施された教員採用試験において、健康スポーツ学科４名（中学校・高等学校保健体育教諭２名、小学校教諭２名）、看護学科３名（養護教諭）計７名の合格者を輩出いたしました。また、健康栄養学科、健康スポーツ学科、看護学科の３学科の卒業生11名からも合格の報告が届いております。教職支援センターでは、卒業生の教採対策指導も行っています！ 今回合格した４名のスペシャルインタビューをどうぞ！

合格者へのスペシャルインタビュー

①教員を目指した理由　②教員採用試験に向けた取り組み
③後輩へのアドバイス

さいたま市
栄養教諭
合格
S.Iさん
（既卒生）

①栄養学生として様々な場所へ実習に行かせていただく中で、学校での実習が１番印象に残ったからです。栄養教諭が子どもたちに食の大切さや楽しさなどを伝えていく姿を見て私もこの先生のようになりたいと憧れを抱きました。

②教職・一般教養は30日完成を繰り返し解きました。専門は受験自治体の過去問を何年間分か解き、傾向に沿って勉強しました。また、学習指導要領や国、自治体から示されている答申に目を向け、専門では各種マニュアルを読み込みました。

③受験する自治体の傾向を掴んだ上で取り組むことをおすすめします！ 募集人数が少なく、倍率も高い職種ですが、諦めずに取り組むことで必ず合格できるのでその日まで強い志をもって頑張って欲しいです

①私が教員を目指した理由は両親が教員であり小さいころからその姿を見て自然となりたいと考えるようになりました。また、教員は多忙できついというイメージがあると思いますが、生徒と一緒に成長できるという所の魅力を感じたことも理由の一つです。

②過去問など繰り返し行い受験自治体の傾向を掴むことを意識しました。傾向がつかめたらとにかく量をこなして自分の知識を深めました。さらに、昨年受験した先輩から教員採用試験について色々話を聞き対策を行いました。

③私は「できることはやる。使えるものは使う。」ということを意識していました。教員採用試験まで勉強や準備などできついことも多いと思いますが、努力した分だけ力がついてくると思います。合格目指して頑張ってください。

新潟市
中学校･高等学校教諭
（保健体育）
合格
J.Kさん

新潟県
小学校教諭
合格
T.Kさん

①両親が教員の仕事をしていたことがきっかけで教員という職業に興味を持ちました。また、人に何かを教えるということが好きということもあり、教員を目指しました。そして、大学での学習支援ボランティアで子どもたちと触れ合い、教員という職業の素晴らしさに改めて気付くことができました。

②学内講座に積極的に参加し、多くの知識を吸収しました。また、学習支援ボランティアも行い、実際の現場を見て、２次試験の対策も行いました。また、問題集を解くなどのことも根気強く行いました。

③とにかく「早め」が大事だと思います。意外と時間は早く過ぎてしまいます。考えるよりも、まず動くことが大事だと思います。そして、動いてから分からないことがあったら周りの人を頼ってみて下さい。新潟医療福祉大学は頑張るあなたを応援してくれます。

①中学生の時の職業体験で小学校へ行き、子どもたちや先生方との関わりに楽しさを感じて教育の道を目指しました。中でも養護教諭の姿に強く憧れ、子どもたちの心身の健康を守り育てたいと思いました。

②受験自治体の情報を集め、できることから始めました。特に論作文や実技試験など早めに対策をした方が良いと思った内容は、学内講座や個別指導を積極的に活用していました。筆記試験対策は問題集と過去問を繰り返し解いていました。

③教職支援センターの活用が大切だと思いました。情報を得られるだけでなく、教職を目指す仲間と交流できる貴重な場でもあります。仲間たちの言葉や姿勢は、試験対策だけでなく人としての成長に繋がりました。全力で応援しています！

山形県
養護教諭
合格
K.Oさん

あとがき

教育にも「不易」と「流行」があると言われます。タブレット端末の導入は、まさに「不易」と「流行」の典型的な例と考えます。タブレットは教育の新しい「流行」として登場し、授業の方法や子供の学び方に大きな変化をもたらしました。これらの技術は授業効率を高めたり、子供の興味や関心を維持・向上させたりすることが期待できます。しかし、同時に、基本的な教育の目標や価値観、思考力、問題解決能力、コミュニケーション能力といった「不易」な要素は変わることなく、タブレット端末を導入する過程でも重要視されるべきです。このように変わりゆく「流行」に対応しつつも、「不易」な基本価値や目標を見失わないことが大事になると考えます。今回のニューズレターでは、授業づくりに関する内容が多く、私自身が教育に関する「不易」と「流行」というものを改めて考えさせられました。是非、ご一読いただきそのようなことを考えるきっかけにしていただけると幸いです。　（健康スポーツ学科　高田大輔）

新潟医療福祉大学　教職支援センター ニューズレター
2023年11月30日発行

発行 新潟医療福祉大学 教職支援センター運営委員会
〒950-3198 新潟県新潟市北区島見町1398番地

お問い合わせ
E-mail：kyoshoku@nuhw.ac.jp
ＷＥＢ：https://www.nuhw.ac.jp/teaching_career_support/

WEB

新潟医療福祉大学 教職支援センター　検索